

---

# Once again...

折原奈津子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Once again…

### 【Nコード】

N5349BA

### 【作者名】

折原奈津子

### 【あらすじ】

夫の浮気相手が妊娠。

戻ってこない夫から、6歳の息子を連れて別居、離婚調停中。  
30歳。

建築部品の企業に、受付事務として勤務。

勤務先で19歳の時に1年間、バイト先で知り合い付き合っていた、  
2つ下の元彼と再会。

すっかり営業トップのエリートになっていた、女子社員からの人気  
も高い元彼。

猛アタックを受けて、親子ぐるみで付き合いが再開？

## 登場人物

ふじもり あやね  
藤森綾子

30歳 夫と別居中、受付事務を

しながら息子を養育中。

藤森翔太

6歳 サッカーが大好きな元気

一杯の男の子

藤森隆弘

32歳 浮気相手が妊娠、本気

になって家庭を捨てる。

小栗修平

28歳 綾子と同じ勤務先のエリ

ート営業マン。綾子の元彼。

マキさん

50代後半 綾子と同じ会社の工

場スタッフ。怒らせたなら面倒な人。

安井ヨシキ

34歳 綾子と修平の担当してい

る大手建築会社の営業マン。

情報が増えたら、その分内容を追加していきます。

## 登場人物（後書き）

久々に執筆の神降臨で、やっと意欲が戻ってきました。

不定期に鳴るかもしれないませんが、頑張つて書いていきたいと思いま  
すのでよろしく御願いたしますw

## 新しい生活の始まり

「おかさん、おとさん…今日も帰ってこない？」

「そうみたい…ごめんね、翔太も寂しいよね？」

「んー、僕、おかさんがいれば別にいい。帰ってきてもおとさん、怒ってばかりだから嫌いだ」

「そっかー」

結婚して8年。

夫は勤務先の派遣社員の女性と、いつからかそんな関係になった。気が付いたのは、彼の寝言。

「里美…」

彼はその女性の名前を何度となく口にした。

いつしか、生活費を入れてくれることも少なくなり、小学生になった息子を学童に預けて勤めだしたのはこの春の事。

なんとか社員として中途雇用をしてもらえたのは、建築部品などを扱う企業の東京支店。

本社は関西にあるので、社内でも関西弁が飛び交っている。

配属されたのはドアハンドルや戸当り、車止めなどの資材の受発注を取り扱う部署だった。

来客の応対、データ入力、電話の受発信とやる事はものすごく多かった。

それでも、殆ど残業をしないですむ。

それがすごく助かるし、収入もそこそこもらえている分やりがいも出ると言つものだ。

勤務先から、校内にある学童までは40分。

そこから自宅までは、およそ7分。

駅からまっすぐに自宅に戻れば、徒歩で15分。

18時までには延長料金も掛からないため、18時に学童を出た息子の翔太が帰宅して少し経った頃に私が到着する。

着替えをして、すぐに夕飯作りを始めて、2人きりでの夕飯は大体19時半。

夫の隆弘がいた頃は、ちよつと大変だった。

うまく言えば、ある意味で亭主関白。

でも我が家はそうじゃなかった。

ただ命令されて、その通りに出来ないと怒り出す。

だからシン…とした食卓だった。

夫が愛人を作り、別居を始めてからは、生活は少し苦しくなりはした。

でも、翔太と2人で囲む食卓は、いつも和やかで明るいものに変わった。

「里美に子供が出来た。だからそっちには戻らない」

「そう…じゃあこちらはどうしたらいいんですか？こっちにもあなたの息子がいるんです。その責任は？」

「お前がいるだろ？それでいいじゃないか」

「…正式に離婚するという事ですか？」

「当たり前だ。じゃなきゃこっちにいる意味がないだろ」

「ならば、こちらは正当な養育費と慰謝料を請求します」

「そのマンションをくれてやる。それでいいだろ」

「冗談でしょ？ここの頭金で払ったお金は私の貯金じゃないですか！ローンだって残っているのに！」

学生時代からバイトして、ずっと貯金を続けてきた。

だから結婚した時、私はそこそこの金額を貯金できていたわけで。

そこから頭金を出し、生活費を貰えなかったここ最近、残っていた貯金を切り崩して生活していた。

購入したのは7年前。

私が23の時だ。

だからローンもまだ残っている…当たり前だけど。

このマンションを貰う…ローンも貰うって事になってしまう。

冗談じゃない…私は翔太を守っていかなきゃならないんだから!!  
すぐに私は仕事を探し始め、知人の紹介でなんとか今の勤務先を見つけた。

社宅は独身者向けの寮だけで、家族向けはない。

けれど家賃補助をしてもらえる事になり、すぐに部屋を探した。

かわいそうだけど、幼稚園のお友達と同じ学校には入れて上げられない。

生活能力に見合った場所に引越さなくちゃいけなかったから。

そして同時に、離婚調停を始めた。

慰謝料や、特に養育費なんて当てにはならないけど、マンションの頭金分くらいは取り返したかったから。

「T A J I M A 資材部藤森です。安井様、いつもお世話になっております。どうなさいました？」

その日の朝、一番で受けた電話は、大手の建築会社から。

安井さんという営業さんは、かなりのイケメンでわが社でも人気のある方だ。

身長はものすごく高いわけではないけれど、スタイルも抜群でなによりいつもにこやかだ。

入社後資材の担当になった私にも、優しくしてくださる…が、お互いにその気はない。

なのに、ちよつと社内で睨まれる事があるのが、私としては解せないのだ。

「藤森さん、悪いんだけどさ、どうしても今日中に必要な品物があるってさ。手配出来ないかなあ」



「今日中ですか？随分と急なんですね。ただこちらに在庫があれば、お渡しする事は可能だとは思いますが…」

「現場のミスで、発注し忘れてたらしいんだ。一番最初に発注の必要があるものだったんだけどね」

それはドアハンドルではあったけれど、長さなどを調整したりしなければならぬとの事だった。

幸い本体は東京支店に在庫があるもの。

ただ加工するスタッフが、すぐに出来るのかが問題だった。

「安井様、お待たせいたしました。加工前のもは在庫を確認できたのですが、今日中にお届けできるのか工場の方とも相談させていただきますませんか？あと、御社への営業担当は…営業1課の小栗でよろしかったでしょうか？」

「うん、そうそう、小栗君。さっきうちに来てたから、彼にも伝えであるから。多分すぐに社に戻るって言うてたし、行ってくれると思うんだけど。無理を言うて悪いんだけど…」

「左様ですか。では小栗とも相談の上、後ほどご連絡させていただきます。申し訳ございませんが、今しばらくお時間をいただけますでしょうか」

「うん、分かった。申し訳ないけど、よろしく願います」

「かしこまりました。ではまた後ほどご連絡させていただきます。失礼いたします」

…今日中…マキさん、滅茶苦茶不機嫌になりそう…。

マキさんとは、加工担当のスタッフの一人で、50代後半の気難しいおじさんだ。

マキさんに連絡を入れつつ、営業1課の小栗さんにも社内メールで連絡を入れておく。

案の定、マキさんはちよつと不機嫌になってしまった…面倒すぎる。

「安井様…恨みますよお…」

30分ほどして、私のデスクで内線が鳴ったので受話器を取る。

「はい、資材藤森です」

「営業1課の小栗です。安井さんの件なんですけど、今いいかな」

「あ、はい。お待ちしてました。安井様の指示に基づきまして、工場のほうで準備をしていただけるようにはしておりますが」

「うん、マキさんにも確認した。ありがとう。それで、至急納品用に伝票とか新規カタログも4・5冊用意して欲しいんだけど」

「かしこまりました。では今から立ち上げますので、15分ほどでお持ちしますが」

「うん、それでいいよ。じゃあ、工場のほうに持ってきてくれるかな」

「かしこまりました」

「うん、よろしくね。俺これから工場に移動するから、何かあったらこっちに回して」

「はい、では後ほど伺います」

電話を切ると、小さく溜息を一つ。

すぐにカタログを用意し、専用の袋に詰める。

そしてPCに向かって、特注分の伝票を打ち込む。

正規金額に加工代などもつくので、少々割高。

それを部長に確認印を貰い、経理課へ持ち込む。

請求書部分を切り離し、経理主任に手渡した。

そしてすぐさま工場の小栗さんの元に走った。

入社して仕事には慣れたとはいえ、まだ3カ月の新人。

新人と言うにはちよつと年を取っているけど、新人には違いない。

だから今は自分の業務をこなす事で精一杯で、他部署の先輩たち全員の顔も名前も覚えてたわけじゃない。

「小栗さんってどんな人なのかなあ。あんまりかっこいい人だと、他の女子にいびられちゃうかも知れないしなあ…」

暢気に私はそんな事を考えていた。

まさかこの後で驚愕の出会いが待ってるなんて思っていなかった。しかも…建築資材がいっぱい、倉庫の一部の【工場】で。



10年ぶり…

間違いなく不機嫌だろうマキさんの元にいる小栗さんに、渡さなければいけない伝票とカタログを持って急ぐ。

資材部は自社ビルの2階、3階に経理と設計部、総務部がある。営業部は4階、会議室も同様。

5階に役員室がある。

ちなみに1階は受付とショールームだ。

倉庫と工場は別棟にあり、倉庫部分の上にはそこそこの広さのある独身寮が併設されている。

女子社員は制服着用だが、ロッカーは資材部がある2階に、社員食堂と並んで設置されていた。

「すみません、お待たせいたしました！」

マキさんと談笑しているらしい後姿に向かって声をかける。

ジャスト15分、ちよっと息切れがする。

運動不足かなあとちよっとだけ思う。

「急がせて悪かったね。ありがとう、藤森さん…？」

「え？あ？嘘！」

彼にとっては私の旧姓しか知らないし、私にとってはこんなところ知り合いに会うとは思っていない。

だから二人揃って目を見開いて、声も出ないって感じで。

「なんだあ？お前たち知り合いだったのか？」

「知り合い…っというか…何年ぶりだ？」

「えっと…10年ぶり…かな…」

小栗修平：あたしが19歳の頃に出会って、当時の勤務先で移動になるまでの1年余りの間、付き合っていた人だ。  
2つ下だったから、当時の修平は高校生。

大学の進学と、私の転勤で離れて、それっきりになった。

離れ離れになって10年・・・2つ下だったということは、今は28歳ってことか。

「10年かー、早いな。もうそんなになるのか。藤森ってことは…結婚したんだ…」

「うんまあ…色々あるんだけどね。そんな感じ」

「そっか。まあ積もる話はまた今度。とりあえず、書類とカタログ貰っていいか？」

「ああ、はい。こちらです」

手渡した伝票をチエックすると、ちょっとだけ頷く。

「うん、オツケーです。じゃああとは、マキさんの加工待ちで俺が持ち込むことになったから」

「そうですか、じゃあ私は安井様に連絡して、その旨お伝えします」

「うん、そうしてくれる？マキさん、あとどれ位で出来そう？」

「2・3時間は欲しいな。カットした部分を溶接するから、冷まさないとなんねえしな」

「2・3時間…今は…10時か。じゃあ、2時ごろにはこつちを出る予定だつて伝えてくれるか？」

「承りました。では早速…」

「うん、よろしく」

工場を出て、事務所棟の2階にある資材部へ戻る。

そのまま部長に報告をする。

「大木部長、先ほどの急ぎの加工分の件ですが、あと2・3時間で加工は出来るとのことでした。営業1課の小栗さんが、2時ごろこちらからご持参くださるそうです」

「そうですか、分かりました。先方にもすぐに連絡を入れておいてください」

「かしこまりました」

部長に報告をして自分のブースに戻ると、すぐに安井様に連絡を入れる。

「TAJIMAの藤森と申しますが、先ほどは失礼いたしました。ご連絡いただきました本日中にとのお品ですが、なんとか2時ごろには小栗がこちらから持って出られそうとのことですよ」

「そうですか！あー、助かった！ありがとうございます。届き次第現場には、僕の方で搬入しますので。いやー、本当に助かりました。ありがとうございます、藤森さん！」

「いえ、お役に立ててよかったです。では3時ごろにはそちらへお届け出来ると思いますので。よろしく願いいたします。失礼いたします」

ほっと一息ついたところに「結構余所行きの話し方するんだな、今は」って声が掛かった。

びっくりして振り返ると、そこには小栗産の姿。

「あ…。いえ、仕事ですし当然かと思いますが…」

「ふーん、そう。でも俺にまでそんな話し方じゃなくてもいいんじゃない？」

「…勤務中ですし、ここでは先輩ですから…」

「関係ないと思うけど。ま、いいや。大木部長にも言ったんだけどさ、今回の搬入、藤森さんも来て手伝ってくれる？」

「は？私ですか？」

「うん、そう。君が。カタログも運んでもらいたいし、君にも確認してもらいたいから」

「え、でも…」

いいのか？という顔で部長のブースに目を向ける。

そうすると、頷きながら追い払うようなしぐさをしてみせる。

「…かしこまりました…同行させていただきます」

「じゃあ、2時10分前までに着替えて工場に来て。そのまま車に

積むから」

「はい…」

出勤には幸いスーツで着ていたし、同行するには差し支えないだろう。

「ああ、そのまま直帰だからね。そのつもりでいて」

「は？」

「現場にも同行してもらおうよ。じゃ、また後で」

去っていく小栗さんを呆然と見送ると、はっと思い直して部長のブースへ向かう。

「あの…部長。なぜ私が小栗さんの同行を…？」

「ああ、小栗君と先方の希望のようですよ。お子さんの事もありますし、遅くならないようにとは言っておりますが…お願いできますか？帰りはそのまま直帰していただいて、明日の朝報告をお願いします」

「…かしこまりました…」

2時少し前、着替えを済ませると工場の入り口で搬入を開始している小栗さんの元へ急ぐ。

「お待たせしました…」

今日は黒の細身のパンツスーツ、お気に入りのショルダーバッグ。黒のバックストラップのヒールは、オープントゥタイプのもの。

極普通の通勤スタイルだと思う。

取引先に同行しても…うん、多分問題はないだろう。

「やあ、待ってたよ。こっち、後部座席に積んでおいてくれ」

そう言って、笑って見せた。

相変わらず細身で、めちゃくちゃ背は高いわけじゃないけれど、足が長くてバランスがいいから背が高く見える。

あの頃はサッカー少年だったから短めだったくせのある髪も、ちょ

つと長くなつて後ろに流すように整えている。

そして相変わらずなのは、人懐こそうな笑顔と、焼けた肌。でも10年経つて、やっぱり大人の男つて感じた。

体に合わせて細身の濃紺のスーツに淡いブルーのシャツ、少しクラシカルなダークボルドーの細身のネクタイ。それが良く似合っていた。

渡されたカタログと書類の入った手提げ袋を後部座席に乗せる。

でもそうすると私が座る場所がなくなる。

なぜなら、後部座席には、色々なサンプルやカタログが積み込まれているし、後から積み込んだ荷物が飛び出しているからだ。

「…すごい荷物…」

「まあこれでも営業だからな、常にサンプルもカタログも持つてるし。荷物は大量だなあ」

「いえ、当たり前的事だと思つし」

「よし、じゃあ行こうか。あ、乗るのは助手席だから」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5349ba/>

---

Once again...

2012年1月14日23時51分発行